

# 別寒辺牛川水系及び厚岸湖・厚岸湾に生息するイトウ (*Hucho perryi*) 成魚の行動生態の解明

本多 健太郎\*・水越 麻仁\*・鍵和田 玄\*\*・宮下 和士\*\*\*

\* 北海道大学大学院環境科学院 \*\* 北海道大学水産学部 \*\*\* 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

## 【目的】

日本最大の淡水魚であるイトウ *Hucho perryi* は、現在 IUCN の絶滅危惧種 IA 類に登録されているが、保護方策を策定する上で必要な移動や生息域に関する生態情報は少ない。そのため、本研究では、個体群が安定している北海道別寒辺牛川水系のイトウをモデルに、イトウ成魚の季節的な移動・生息状況を把握し、環境情報と対応させることで、それらの要因を明らかにすることを目的とした。

## 【方法】

2008 年 4-5 月に、別寒辺牛川水系支流上流域及び厚岸湖内において、イトウ成魚 15 個体 (476-839 mm FL) を小型定置網等を用いて捕獲し、腹腔内に超音波発信器を装着して放流した。イトウの通過を記録する受信ステーションとして、超音波受信機を、別寒辺牛川支流合流点を中心に上流から下流まで 25 箇所水温記録計 13 台とともに設置した。また、毎月カヌーで受信機を曳航し、受信ステーション間のイトウの位置情報を補完した。河川が凍り始める 11 月下旬までに得られた移動データは、各環境データと比較・検討した。

## 【結果】

放流後、12 個体からデータが得られ、設置した受信機の総受信回数は 152,398 回であった。データからは、産卵場から降下した後から 11 月末に河川が凍結するまでほとんど河川中流域から移動しない個体や、河口・下流域での移動期と中・上流域での滞在期の 2 つのフェーズを持つ個体、河口域から中流域までを頻繁に行来する個体が確認されるなど、生息域や移動頻度に個体差がみられた。全体的には、春季は厚岸湖から上流域まで生息域が分散したが、中・上流域の水温が下流域より低くなる夏季になると、生息域は上流側へシフトし、中・上流域で狭い範囲に留まる個体が多くみられた。イトウが死亡する恐れがあると考えられている 20°C 以上の水温が河口域で 42 日記録されたのに対し、中・上流域では一日も記録されなかった。秋季では、引き続き中・上流域に留まるタイプと下流へ降るタイプに分かれた。また、潮汐の影響がないエリアでは、シーズンを通して日出・日没時に多くの移動がみられ、日中よりも夜間に多く移動する傾向がみられた。一方、潮汐の影響を受ける下流域では、秋を除いて日中に多く移動する傾向がみられた。